
アカノ百物語

赤色烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカノ百物語

【Nコード】

N9902U

【作者名】

赤色烏

【あらすじ】

とある男の語る怪談話

会社の帰り道、男は不思議なゴミを見つけた

明かりのない夜と蝸牛（前書き）

百個の話を書けばいいのですが・・・無理ですね

明かりのない夜と蝸牛

雨が降っているわけでもなく。

かといって晴れているわけでもない、そんな夜。

特に月もかけている新月しんげつの夜は、なにか雰囲気が悪くなるものだ。さらに明かりの少ない道となれば、何が出てもおかしくない。

越田武雄こした たけお

33歳

帰り道、たいてい人間は疲れ切っている。それは俺も同じこと。

電車に乗っているときはまだ気は張って、空元気のようなものは出てくるものの、駅から離れて家まで歩くときは精神も緩んで限界となる。

まあ、それはいつものことだった。

駅から家までは三十五分、その間には何か所か街灯が壊れている個所がある。

近所では危ないといわれているらしいが、かといって誰かが犯罪に巻き込まれたわけではなく、警察も自治体も手を打っていないのが現状だ。

実際自分もこんなところに税金を使うなと思っていた。

繁華街はんかがいから遠いこともあり、うちの近所は当たりと比べると治安が良い。

犯罪件数も少なく、それが理由で引越してくる人もいるとか。

まあ、そんな場所だから、それゆえに自分はあまり警戒けいかいをしていなかった。

時々人とはすれ違うものの、声をかけることなく通り過ぎるだけの毎日で、危機感きしかんを持つ所因などどこにもなかった。もっとも、警戒をしていたからどうにか耐えたものではないこともある。

俺が巻き込まれたのもまさにそれだった。

初めは、ただ何かあるなという感じだった。

物陰に隠れるわけでもなく、道路の真ん中にそれはいた。

見た目、形容しがたい様相だったが、俺はゴミかと思って通り過ぎた。

実際、後で思い出してもそれはゴミにしか見えなかった。

缶。空き缶が自動車にひかれたもの。ぺったんこにつぶれたそれである。

くすんだ色の混ざった平べったいものが、そこにあった。

大きさは……やはり空き缶ほどだった。

通り過ぎて、歩き去って、しばらくしてそのゴミの形が気になった。

色、形が似ていても、どこか違うのは本能的に分かったのか。俺は好奇心に駆られて振り返った。

やはりそこにはつぶれた缶のようなものがあった。それだけだった。

翌朝、いつもの早朝出勤。

住んでいるマンションは都心から離れているゆえに広く、安い。それはありがたいのだがとにかく会社から遠いだけは勘弁してもらいたくなる。

まあ選んだのは自分なわけで、文句を言う筋合いはないことも理解していた。

口に出さず自分の安い月給と交通の不便さを嘆きながら通勤した。特に意識はしなかったが、昨日の缶はどこにもなかった。

まあ、そんなことは気にしなかった。たかがゴミだ。カラスでも持っていたのだろう。そう思って、駅へと向かった。

その夜は、何もなかった。

いや、実際には何かが起こっていたのかもしれないが、気付かなかった。

その日は会社の飲み会があり、タクシーで帰宅するという、それも前後不覚の状態で帰宅するという結果となった。

それゆえ、帰り道の地面に気を配ることなどはしなかったし、起きてさえいなかった。

ベットに寝転んで、そのまま眠ったことだけは覚えている。

そして翌日の夜。

その日はあいにくの雨だった。

ただでさえ暗い道は、電灯が照らしていないこともあって、真っ暗だった。

もつとも、普段歩いている道ゆえに、おれは壁にぶつかったりすることはなく、頭の中に浮かべた地図に沿って道の真ん中を歩いて行った。

時々ある街灯と、近くの民家から漏れ出てくる光を頼りに家を目指した。

水たまりを踏むたびに、キュツと靴が鳴る。

その状態が十分は続いただろうか。

「ギャツ」

突然何かが足元で悲鳴を上げた。

直後に、足に直接ぬるつとした感触が伝わってくる。

やっちまった。蛙かえろを踏んだな。

ちようど真つ暗なこの場所はすぐ近くに田んぼがあるはずだった。

そこから出てきた蛙を踏んだ。

家に帰って靴を洗うのが億劫だ。

俺はそう思った。

「イタイイタイイ」

また、足元の何かが鳴いた。

「イ。イ。イ。」

まだ生きていたのか。いやな気持ちになって通り過ぎようと足を速める。

十歩ほど歩いてから、先ほどの鳴き声が蛙のものとかけ離れていったことに気付いた。

「ギギキキキ」

後ろでは何かがまだ叫び続けていた。

遠くからゆっくりと光が近付いてくる。

トラックだ。

パツとあたりがヘッドライトによって照らされた。

俺は好奇心に駆られて、後ろを振り返った。

一瞬見えたのは蝸牛かたむしだった。

しかし、そんなものではないことはすぐに分かった。

まず大きい。

人の頭の大きさはある。

そしてドロドロのスライムに、牛の頭を生やした化け物の様相。

「イヒツヒイ」

笑うそいつには気づかずに、トラックは通り過ぎた。

サツとあたりに暗闇が戻る。

「ギギキイ」

あたりに人はいない。

俺は目の前の化け物と二人でいることに気付き、また、さっき見たそのおぞましさに鳥肌が立ったのを感じた。

「ヒイヒイ」

さっきと比べて、叫び声の出所はこちらに近づいてきていた。

同時にずるずると何かが引きずられるような音が聞こえる。

こっちにやってくる。化け物が。

逃げようと思うのに足は動かなかった。

誰か来てほしいと思った。

非力な女でもいい。

だれか、自分を救ってくれと思った。

ずるずる

ずるずる

プツッ

「あ…あああ」

そいつはとうとう俺のところまでやってきた。

ねっとりとした、冷たいものが足元を包み込んだ。

終わった。もう逃げられない。そう思うと逆に緊張感が抜け、自然と足が動くようになった。

とはいえ、ねっとりとした物体に絡まれ、歩くこともままならない状態である。

「ヒヤヒヤヒヤハハハッ」

近く、というより耳のすぐそばで、吐息と奇声があげられた。

何かが近くににいるのに、怖くてたまらないのに、俺は逃げるとい

う選択肢を失っていた。

ブウーーン

地響きがする、頭が働かない。何の音だ？

ブウーーン

く・る・ま。そう、車だ。

先ほどと同じトラックだ。

ひざ丈まで上ってきた何かが、身じろぎした。
いけるかもしれない。

「キキキッ」

泣き叫ぶ化け物の殻の部分をつかむ。

つかんだそこは蝸牛のそれとは違い、柔らかく、ぬめっていた。

「グアアア!!!」

「うわああああ!!!」

爪を立て、手に伝わる不快感を無視して握りしめた。

そのまま、体から引きはがす。

思ったよりも粘着力はなかったようで、あっさりとそいつは俺の
体から離れた。

ブウーーン

「轆ひかれる!!!」

そのままそいつをトラックへと放り投げる。

先ほどと同じく、そいつはトラックの運転手には見えなかったら
しい。

回避行動もブレーキも掛けず、トラックは化け物に突っ込んでい
った。

グチャッ

「……………!!」

俺には確かに、何か大きいものが引かれた音と、無言の悲鳴が聞こえた。

トラックは何にも気づかず過ぎていく。

ヘッドライトが遠ざかることで、またあたりが暗闇に包まれ始めた。

真っ暗闇。

俺はそのまま逃げだした。

化け物の生死を確認しなかったことは今でも悔いている。

だが、そのときはそんな余裕はなかった。

俺はそのまま逃げ出して、走り続け、翌日の出勤まで寝ずに過ごした。

翌朝、恐怖に駆られながらも、太陽の光に支えられて例の道を歩いた。

そこには何もなかった。

実際、俺には昨日何かが起きた証拠はどこにもなかった。

家に帰って、ズボンが少し濡れていたことぐらい、それもすぐに洗濯してしまっている。

夢だと思った。

実際、非現実を現実と考えるのには、それもたった一度の体験で考えを変えるのには無理があった。

「あー、すみません」

「え、はい」

そんな最中、誰かが後ろから声をかけてきた。

振り向いた俺は、緊張で引きつった。

誰だっけ警察官に呼び止められたら緊張ぐらいするだろう。

俺も例外ではない。

「あのーおとといの夜、ここを歩かれましたか？」

「おとといの夜ですか？」

夜、という言葉に反応しかけたが、おとといの夜はのんきに酒を飲み、タクシーで帰っている。

その旨を報告すると、警官は、そうですか、とだけつぶやき、質問の対象をとの通行人へと変えた。

何かあったのだろうか？

そう思いながらも俺はそれよりも重大な問題、今夜帰りにここを通らなければいけないことに考えを向けた。

向けたのだったが……

「昨日ここで水死体が見つかりましてね。ええ、近所の方ですが、田んぼに死体が埋まっていて見つからなかったのですよ。こんなところで水死体でしょ、事件性があるってことになってね……」

後ろから聞こえた話に、思考が停止した。

夜、水死、近所、もしかしたら、あいつの仕業か……

あのまま昨日の化け物に身を任せていたらどうなっていたのかを聞かされているようで、寒気がした。

足が止まった。

夢じゃない、昨日のあれは夢じゃない。

その夜から俺は会社に泊まり込み、夜中に帰宅することをあきらめた。

その生活は会社近くの駅前にある、小汚いアパートに引っ越するまで続いた。

新しい部屋は駅前の喧騒が飛び込んできて騒がしい。

しかし、決して帰宅中に一人ぼっちとなることはない。

確かに、あの化け物はトラックにひかれたかもしれない。

しかし、まだ生きている。

俺はそう確信していた。
だからこそその防衛策。

あの事件から二年、田んぼで起きた水死事件の犯人は捕まってい
ないらしい。

「終わりだ」

越田は静かに言った。

あたりはまだ明るい。

だが、その声はかすかに震えていた。

それだけ怖い体験だったのだろう。

「お疲れ様です」

「ああ、いや、ずっと誰かに聞いてもらいたかった。少し楽になっ
たよ」

私が珈琲を差し出すと、彼の震えは収まった。

静かな部屋の中で、彼は少し躊躇ったのち、口を開いた。

「君はあいつが生きていると思うか？」

「あいつ、蝸牛の化け物ですか？たぶん生きているでしょうね」

「やっぱりな」

やっぱりといいながら、その顔が少し恐怖に引きつったのが私に
はわかった。

きくと、彼は今日までずっとあの化け物におびえ続けてきたのだ
ろう。

このままでは少しかわいそうだ。

「でも、越田さまのところにはもう出ません」

「なぜ？」

その問いには、勝手なことを言うな、という怒りも込められていた。

それを理解したうえで、続ける。

「一度痛い目に合っているのですよ。また寄ってくるわけがないじゃないですか」

「復讐されるかもしれない」

「そんな知性があるように見えましたか？」

「……」

彼も、もうわかってはいるはずだ。

またあれに会う確率がどんなに少ないことかは理解しているはずだ。

でも、怖い。

「もう夜ですが、もう少し残られますか？」

「いや、明日は仕事でね。もう帰ろう」

私と話したことで、少しは気分が楽になっていればよいのだが……

がちゃん

私の後ろで扉が閉まった。

「これで一話目ですか。百個集まるにはどれだけかかることやら」

先ほどの語り手と違い、私には愚痴ぶくる相手は存在しない。

狭い部屋に、珈琲の香りだけがほのかに漂っている。

明かりのない夜と蝸牛（後書き）

越田武雄 サラリーマン 二年前に化け物と遭遇、それ以来おびえて暮らしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9902u/>

アカノ百物語

2011年8月8日03時28分発行